

「チャタトンの死に寄せる哀歌」と「やかんの哀歌」

——コールリッジの自己パロディ——

橋 本 健 広

「チャタトンの死に寄せる哀歌」(“Monody on the Death of Chatterton”)は、17歳で夭逝した Thomas Chatterton (1752-1770) の死を悼んで、Samuel Taylor Coleridge (1772-1834) が生涯を通して書き続けた詩である。一方、「やかんの哀歌」(“Monody on a Teakettle”)は、やかんが壊れたことを嘆く詩であり、若い時期に創作、推敲されたもののその後出版はされず、晩年 Henry Nelson Coleridge の編纂によって初めて出版された、「チャタトンの死に寄せる哀歌」に対してコールリッジが自分で書いたパロディであると言われている。¹⁾

これまで、「チャタトンの死に寄せる哀歌」については、創作の過程を示す資料の発見や時期ごとに異なる詩の内容についてさまざまな議論がなされてきた。歴史的な議論としては、まずコールリッジの友人で印刷を手がけた印刷業者の Joseph Cottle (1770-1853) が、1837 年の回想録の中で、1794 年に出版されたチャタトンの詩集に掲載する予定で活字まで組んだが最終的に掲載を取りやめた付記と、その中止の理由を紹介した (32-36)²⁾。C. G. Martin は付記の前文と、付記に登場する人物の素性を調べて、叙情的な作品と考えられていた 1794 年の版が階級や富や宗教に対する批判という政治的な意図をもっていることを示した (396)。そして Ar-

1) パロディの可能性については、Keach のつけたペンギン版の注 (434) を参照。

2) この付記はその後 1796 年コールリッジ自身の『詩集』(*Poems on Various Subjects*) に掲載された。

thur Freeman と Theodore Hofmann は 1794 年のチャタトンの詩集につけられた、献辞の詩としての「チャタトンの死に寄せる哀歌」の校訂刷りを発見し、活字まで組まれたにもかかわらず、最初の版の詩はいったんほぼ新しく書き直されたことを指摘した(334-35)。また批評的な議論では、I. A. Gordon はテキストの様式と内容が時期ごとに異なることを指摘し、テキストを大まかに四つに区分してそれぞれの特徴を述べた(50-67)。この区分を踏まえ、David Fairer はコールリッジとチャタトンの共通点を挙げ、「チャタトンの死に寄せる哀歌」が 1790 年から 1794 年にかけて政治風刺的な詩から叙情的な詩へと変化したことを指摘して、詩の傾向の変化はコールリッジを取り巻く状況の変化を表すものと主張した(245-248)。また Paul Magnuson は、マーティン、フリーマン、ホフマンの研究を踏まえ、テキスト生成の最初の瞬間はひとつでも固定してもおらず、様々な要因によって言説となるというテキストの変動性を主張している。

このように、これまでの「チャタトンの死に寄せる哀歌」の研究によって、テキストをいくつかの創作段階に分けることができ、また内容について、階級や富や宗教に対する批判という政治的な意図を含みうることが指摘されている。これに対し、「やかんの哀歌」に関する議論は少なく、キーチの注やプリンストン版の注に、「やかんの哀歌」のある草稿は、「チャタトンの死に寄せる哀歌」のパロディであろうという言及がわずかにみられるだけである。この草稿とは、上記二編の詩を含む、三篇の詩がまとめて一枚の紙に手書きされた草稿のことであり、1790 年にコールリッジの兄 George Coleridge に宛てて書かれたといわれる³⁾。キャンベルの編集した 1893 年の版では、この手書きの草稿に記された三編の詩が掲載されている(8-13)。本論ではこの手書き草稿に注目し、この草稿が実在するという前提の下に、テキストの変動性という観点から、1790 年の段階での草稿の意図やパロディの機能を検討し、「やかんの哀歌」は「チャタトン

3) 草稿の特徴についてはキャンベルの注(562-63)およびメイズの注(29)を参照。

の死に寄せる哀歌」の、パロディというよりはむしろ自己パロディであるという考えを提唱したい。そして自己パロディを創作する誘因となったコールリッジの詩における対話的な傾向について触れたい。なお、草稿は現在所在がわからなくなっているため、キャンベルが編纂した1893年版の詩を、草稿に書かれたテキストとして取り扱う。パロディとは、ここでは、Simon Dentith、およびイギリス・ロマンス辞典のパロディの項にかかれた定義を参考にして、他の特定の、あるいは自己の文学作品や文体を、おかしみを交えながら、揶揄的に、また暗示的に、支持あるいは攻撃するために模倣するものと定義したい (Dentith 9-21, 37; 松島 454)。そして自己パロディとは、テキストが自己のテキスト自体をパロディの対象とすることと定義したい。

1. 草稿

最初に、草稿に書かれたテキストについて考察したい。この草稿には、上述のように、一枚の紙に「チャタトンの死に寄せる哀歌」、「やかんの哀歌」及び「インヴォケーション」(“An Invocation”)の三篇の詩が手書きされたものである。それぞれの位置関係や、その他の記述などについては詳細がない。この草稿の存在が明らかになったのは1893年刊のキャンベル編纂による *The Poetical Works of Samuel Taylor Coleridge* においてである。キャンベルは「チャタトンの死に寄せる哀歌」の注で、「草稿のひとつは作者の手書きによるもので、学校から兄のジョージに送られたもの」(562)であると述べる。また「やかんの哀歌」の注では、「1790年クライスツからコウルリッジによって送られたあるいは家に届けられた」(563)と述べている。この記述から、この草稿には何らかの理由で当時コールリッジが在籍していたクライスツ・ホスピタルのものであることを示す痕跡が残っていたものと思われる。1790年当時コールリッジは最上級生として全寮制のクライスツ・ホスピタルに在籍しており、このクライスツ・ホスピタルはセントポール大聖堂に近いニューゲート通りにあった

(Holmes 26)。またジョージは、コールリッジが送った手紙の消印によれば、ロンドンのハクニー地区に住んでおり、歩いていくことも不可能ではなかっただろう (*Letters* 5-6)。そのため手紙とともに封筒に同封された草稿であったかどうかはわからない。ただし、1790 年前後コールリッジはジョージに宛てて数通の手紙を送っており、多くの場合、コールリッジの詩が添えられていた。また、一通の手紙に複数の詩を載せることもあったため、この草稿の存在は肯定してもよいと思われる。⁴⁾

キャンベルの「やかんの哀歌」の注では、この詩は草稿においては「ごく最近の不幸の際に作られた第二の哀歌」という題がつけられていたとされる (563)。また、「やかんの哀歌」の最初の行は、“MUSE that late sang another’s poignant pain,” と始まっている。「第二の哀歌」という表題とあわせて考えると、“another” 「もう一人の人物」はチャタトンと考えられ、「やかんの哀歌」は「チャタトンの死に寄せる哀歌」に明らかに言及しており、二つの詩はこの草稿では一組のものとして考える方がふさわしいと思われる⁵⁾。

草稿に付されたもうひとつの詩篇「インヴォケーション」は、注意が必要である。メイズは草稿に書かれた三篇の詩に関連があると考えておらず、プリンストン版の注で、この時期コールリッジが書いた詩に助言を与えていたジョージに対して書かれた草稿であり、また「インヴォケーション」は途中で書くのをあきらめたソネットの最初の八行と思われることから、「この詩の題はキャンベルによってつけられた可能性が高い」としている (1: 31)。メイズは、コールリッジがジョージに詩を添削してもらうつもりで書いた草稿と考えているようである。しかし、コールリッジの頭の中で考えられていた詩が、1790 年この草稿を書いたときに、文字として表れたのが現在草稿にみられる詩であると考ええるならば、三篇の詩には何ら

4) cf. メイズのプリンストン版の注を参照 (23)。

5) キーチのペンギン版の注では、「やかんの哀歌」のオッターリー本版の第一行 “O Muse! who sangest late another’s pain,” について、「チャタトンの死に寄せる哀歌」との関連を述べている (434)。

かの関連があると考えてよいと思われる。

メイズの推測同様、「インヴォケーション」の題はキャンベルがつけた題であると考えられる明白な言及がある。キャンベルは、「やかんの哀歌」につけた注で “The lines I have called *An Invocation* (p.10) are on the same sheet.” (563) と述べている。「インヴォケーション」とはキャンベルのつけた題に他ならず、草稿上では、この詩は題名のない詩の断片であったのである。本来の草稿上には、「チャタトンの死に寄せる哀歌」、「ごく最近の不幸の際に作られた第二の哀歌」、および無題の詩の断片の、計三篇の詩があったことになる。草稿を実際にみたキャンベルが、無題の詩の断片に、詩的靈感を得るために伝統的に詩の初めにつけられた「インヴォケーション」の題をつけた理由は、三篇の詩に強い関連があると考えたためではないだろうか。

「インヴォケーション」の詩は、キャンベルのつけた題を念頭において読むと、詩的靈感を得るための詩行と読める。だが、本来の草稿を再現し、無題の詩行として読むと、別の側面を読み取ることができる。

SWEET Muse! companion of my every hour!
Voice of my Joy! Sure soother of the sigh!
Now plume thy pinions, now exert each power,
And fly to him who owns the candid eye.

And if a smile of Praise thy labour hail
(Well shall thy labours then my mind employ)
Fly fleetly back, sweet Muse! and with the tale
O'erspread my Features with a flash of Joy! (1-8)

“Muse” とは、ゼウスと「記憶」の女神の間に生まれた9姉妹のひとりを指すが、*Oxford English Dictionary* によれば、「特定の詩人に靈感を与える女神」であり、詩人の様式と精神を表す「詩人の特別な守り神」であるという。草稿におけるこの詩の断片では、“Muse” は常に語り手に寄り添い、喜びの声を代弁し、悲しみに沈むときにはなぐさめてくれる友人のよ

うな存在である。詩的靈感であり、同時に詩的想像力を意味するものと考えてよいだろう。

だがこの友人である“Muse”は、また別の働きもする。すなわち、「偏見のない誠実な目をもつもの」のところへ飛んでいき、ひとたび賞賛を受けると、語り手である詩人のもとへすぐさま戻ってきて、詩人を喜ばせるのである。この詩人はコールリッジ自身を指すと思われる。しかし「偏見のない誠実な目をもつもの」とは誰を指すのであろうか。キーチはペンギン版の注で読者であると述べている(434)。読者であるとするならば、「偏見のない誠実な目をもつもの」は、「チャタトンの死に寄せる哀歌」において、チャタトンが死に至る原因となった“the keen insult of th' unfeeling Heart”(74)を行った当時の批評家・上流社会の人物、またコールリッジに同じ侮辱を行うと考えられる批評家を反対の立場の読者として示していると考えられる。だが、1790年の時点で、コールリッジはわずかにひとつの詩が雑誌に載っただけのほとんど無名の詩人であり、批評家の目を気にしたとは考えにくい。またチャタトンに侮蔑的な態度をとった一人である Horace Walpole (1717-1797) に対して、コールリッジは1794年の段階の詩につける予定だった破棄された付記にウォルポールを非難する文を載せているが、1790年に書かれたこの草稿はジョージに宛てて書かれた私的なものであり、読者がほかにいるとは考えられない。加えて、15世紀の Thomas Rowley が書いたとされる一連の詩の作者は、ロウリー本人か18世紀のチャタトンかという「ロウリー論争」は、1784年頃までに一応の決着を見ており、チャタトンであると考えられるようになっていた(宇佐美 303-306)。

「偏見のない誠実な目をもつもの」はむしろジョージひとりを指すものと考えてよいのではないだろうか。コールリッジは、William Wordsworth (1770-1850) や Robert Southey (1774-1843)、Charles Lamb (1775-1834)、William Lisle Bowles (1762-1850)、John Thelwall (1764-1834) などと親交を結び、目の前で話をしている場合はもちろん、直接会えない場合は

手紙で詩のやりとりをし、互いに補う形で創作活動をしていたことが知られている (McFarland 263-303)。ラムとはすでに親交があったと考えられるが、彼らと知り合う前、1790 年前後でコールリッジが詩を発表し、監修を受けていた相手は、主にコールリッジの兄の Luke とジョージであった。ルークは 1790 年 2 月に死去しているためやりとりがあったかどうかかわからないが、ジョージとは 1791 年以降頻繁に手紙でやり取りし、監修を受けていたことが知られている⁶⁾。コールリッジがジョージを父のように慕っていたことも知られている (Holmes 14-15)。すると、この「偏見のない誠実な目をもつ」ジョージのもとへ飛んでいき、賞賛を受けてもどってくるという “Muse” は、互いの意志疎通のことも意味すると推測されるだろう。1789 年から 1791 年の間に書かれたと考えられるコールリッジの詩には、“Muse” を詩的靈感以外の何か別のものにたとえた「詩神に寄せるソネット」(“Sonnet: To my Muse”) という詩が残っている。この時期クライスツ・ホスピタルでコールリッジを指導していた James Boyer はこの詩に表れる “Muse” を、クライスツ・ホスピタルの乳母あるいは寮母の娘である Jenny Edwards のことだと指摘した (*Biographia* 6; *Collected Works* 1:25)。この「詩神に寄せるソネット」に、「つつましい詩神よ、お前の美しい働きは、僕の心を喜ばせ、ぼくの胸を純粹にする」(5-6) とあり、“Muse” とは、病床にあるコールリッジをやさしく看護したと言われる寮母の娘を指していると取れるだろう。当時のコールリッジの詩では、“Muse” は必ずしも詩的靈感を意味しないのである。

草稿の詩の断片に見られる “Muse” は、詩的靈感と同時に詩作品によるメッセージのやりとりによる詩的対話を同時に意味すると考えられる。題名のない詩の断片は、ジョージとの詩的対話を暗に意味する内容と読むことができる。コールリッジは、詩的対話によって、お互いに刺激しあい詩を作っていくように、草稿に付された作品がジョージに読まれることを期

6) *Collected Letters of Samuel Taylor Coleridge* の 1789 年から 1792 年の手紙を参照。

待したのではないだろうか。また草稿に特別の詩行を加えることによって、草稿に記された三篇の詩が、あるテーマを持ったひとつの「作品」として読まれることを期待したのではないだろうか。そしてまた、詩的対話の形で“Muse”がジョージのもとに飛んでいき、またコールリッジのところへ戻ってきて、コールリッジの顔を喜びで高潮させるという内容は、コールリッジが詩作において対話を求め期待していたのではないかと考えられる。ここで詩作における対話というのは、詩の中で、あるいは詩作品を提出することで、対象となる特定の相手と何らかのメッセージのやりとりをおこなうという意味である。

1791年3月31日にコールリッジがジョージに宛てた手紙では、ユークリッド幾何学を基にした数学の詩が書かれており、コールリッジは手紙の最後で「あなたの詩神から生まれたさらに価値のある子孫を、返信で受け取ることを期待します」と述べている（*Letters* 7）。コールリッジとジョージとの間で“Muse”という言葉が自然につかうようになった可能性も考えられるが、少なくともコールリッジが、ジョージと手紙のやりとりをするなかで詩を作りあおうとしていたことは確認できる。ジョージがこの求めに答えたかどうかはわからないが、いくつか詩を見せあって互いに刺激しあい詩作を行っていたことは確かなようである。たとえば1791年6月22日のジョージ宛ての手紙では、ジョージの求めに応じてコールリッジは自作の詩を手紙に同封しており、またこの中で、ジョージが詩作中の「人の墮落」（“Fall of Man”）という詩の中に入れようと考えているオードあるいは賛美歌について街で会って話しあおうとしていることが述べられている（*Letters* 11）。後に、ワーズワースや Dorothy Wordsworth、サウジー等と行った相互に刺激しあい影響しあって詩を作っていく「共生」的な関係は、ジョージとの間にもみられるのである⁷⁾。コールリッジには、早い時期から、他者と詩作において対話をしようとする傾向があったと考

7) 詩作における「共生」的な影響関係については マクファーランドを参照(263-303).

えられるだろう。この詩作における対話は、後にコールリッジの「驚異の年」と言われる多作かつ代表作を書いた時期に、詩作上の決定的な役割を果たすことになるのである。草稿に関する以上の考察から、草稿は三篇の詩をあわせてひとつの作品として書き記され、また、コールリッジに詩作における対話を求める傾向があることがわかった。以下、「チャタトンの死に寄せる哀歌」と「ごく最近の不幸の際に作られた第二の哀歌」（題名に言及する必要がある場合を除き、本論では便宜的に「やかんの哀歌」と述べる）の製作意図および関係について考察したい。

2. 「チャタトンの死に寄せる哀歌」

「チャタトンの死に寄せる哀歌」⁸⁾は、作品の価値が世間に認められないため若くして自殺した悲劇の天才として、ロマン派の詩人に深い影響を与えたチャタトンの死を嘆き、追悼の意をこめて書かれた詩である。この詩はコールリッジの生涯を通じて書かれ、また13歳のとき書いたというコールリッジ自身の言葉によれば、1785年から書き始められ⁹⁾、亡くなる年の1834年まで約50年間にわたって書き続けられた。その間に、詩行、スタイルともに大きく変化した。フェアラーによれば、1790年に90行であった詩が、1794年には107行に、1796年には143行に、1797年には135行に、1803年には119行に、1828年には143行に、1829年には154行に、そして1834年には165行にと増減している(231)。メイズは、I.A. ゴードンの区分をもとに、詩の内容とスタイルから、「チャタトンの死に寄せる哀歌」を大きく三つの創作段階に分けた(*Collected Works* 1: 139)。最初の創作段階が1790年に書かれたピンダロス風の政治風刺がこめられた8行連句の詩であり、この段階の詩には草稿が三つと、本論で扱っているキャンベルの報告した失われた草稿、および印刷されたが

8) 「哀歌」(“Monody”)とは、ペンギン版のキーチの注によれば、17世紀以降のイギリスでは、語り手が死んだ人のことを嘆く歌のことを意味する詩である(434)。

9) E. H. Coleridge 編のオックスフォード版の注を参照(125)。

取りやめた詩がある。第二の創作段階は、政治風刺的な表現をほかし、叙情的でメランコリックな印象を前面に出したロマン派風の詩であり、わずかに 17 行を最初の段階の詩からとったのみであとはすべて最初から書き直している。この段階の詩には五つの出版された詩と草稿及び中止した版の校正刷りが残っている。最後の創作段階は、ジョンソン風の対句を使用した古典主義時代風の詩であり、コールリッジとチャタトンがともに向き合う光景を追加した詩であり、この段階の詩は二つの出版された詩と草稿がひとつある。また、1823 年には若い時期の詩として 1790 年の詩の写し、すなわち上で述べた最初の段階の三つの草稿のうちのひとつが、手を加えることなくふたたび出版されている。このように、「チャタトンの死に寄せる哀歌」は、ひとつの詩に定まらず変化し続けた詩であり、「決定稿」の存在を容認し得ない詩である。

特に、最初の創作段階の詩については、オッターリー本といわれるノートに書かれていたもの、クライスツ・ホスピタルの校長ボイヤーが生徒の詩を集めてつくった *Liber Aureus*、そして 1828 年版の転載の三つの草稿と、本論で扱っているキャンベルが報告したが所在がわからない草稿、それに加えて、活字まで組んだものの、校正の段階ですべてとりやめた試し刷りが残っている (Freeman and Hoffman 330-331)。オッターリー本とは、1791 年の夏、コールリッジが生家へ帰った際、家族のために、そのときまでに書いた詩のなかから家族の好みに合わせて選んで書き写した本である (*Collected Works* 1: cxv)。本論で扱う草稿については、キャンベルによれば、他の草稿と違いは見られないという。

チャタトンは、17 歳で服毒自殺したブリストル生まれの詩人で、15 世紀のブリストルの修道僧トマス・ロウリーの作と称して、後に「ロウリー詩篇」と呼ばれ賞賛されることになる一連の詩を書いた。この「ロウリー詩篇」の真義をめぐる論争は「ロウリー論争」とよばれ、コールリッジが草稿の詩を書いた 1790 年までには「ロウリー詩篇」はチャタトンの作であるとしてはほぼ決着がついている。また 1777 年、1778 年、1782 年には

チャタトンの詩集が死後出版されている。1782年の詩集は、Jeremiah Millesの編纂であり、チャタトンに批判的であった。詩人チャタトンについての詳細も次第に明らかになり、1790年までには、チャタトンがいくつかの新聞にかなりの量の政治風刺詩・宗教界を批判する風刺詩を書いていたことが知られるようになっていた¹⁰⁾。

「チャタトンの死に寄せる哀歌」は、桂冠詩人 Thomas Warton (1728-1790) の “The Suicide” に対して異議を唱える形で書かれた詩だと言われている (*Collected Works* 1: 139)。ウォートンの詩では、詩の登場人物は刃物を使って死に (17-18)、そして智天使が登場人物に対し、真実が明らかになるまで誤解された状態を耐えるように説き (79-84)、登場人物が死を早まったことのおろかさを嘆く (97-102)。

これに対し、コールリッジはチャタトンに同情的である。「チャタトンの死に寄せる哀歌」では、チャタトンの姿はコールリッジと同一視されている (Fairer 230)。またコールリッジは失望や嘲笑と困窮により死ななければならなかったチャタトンの運命を悲しみ、同時に怒りを覚える。この怒りは社会秩序を改善せず、貴族や富めるものが利を得る国家に向けられる。チャタトンの志の高さを称揚し、憎むべき敵には断固として戦う姿勢を見せるのが特徴である。

初めに詩神は詩人に靈感を与えて歌を作らせるが、詩人は靈感の中でチャタトンの声を聞いたように思う。それはまちがいでなく、詩人は、〈困窮〉 (“Want”) と 〈冷酷な無視〉 “cold Neglect” がチャタトンの心を冷やしたため、チャタトンが毒杯を仰いで死に、その鉛色の亡骸がむきだしの大地に倒れる姿を見る。悲壮感、怒り、悲しみといった様々な感情が詩人の中で表れては消える。詩人は、天才の価値を認めなかった国家に対する怒りを覚え、困窮に耐えられなかった風刺詩人の Samuel Butler (1612-1680) や悲しみに沈んだ悲劇作家 Thomas Otway (1652-1685) にも触

10) チャタトンの詳細については宇佐美道雄『早すぎた天才：贗作詩人 トマス・チャタトン伝』(東京：新潮、2001)を参照。

れ、ブリトン人はなぜこうした悲劇に対し憤りを感じなかったのかと疑問を唱える。詩人は、まだ意気盛んで名声に自信を持っていたころのチャタトンがコールリッジと同じ故郷からやってきて、「ロウリー詩篇」のひとつを創作する姿を見る。チャタトンは黄金を夢み、寡婦や孤児や借金に苦しむ人を哀れみ、自由を唱えて、圧制者に制裁を加える。詩人はチャタトンの悲しい運命を思い、目をそらす。そこは喜びが死に絶える場所であり、〈巨人の姿の貧困〉(“Poverty of Giant mien”)が幅を利かせる。チャタトンの顔に喜びはなく、精神的な苦悶のみが見られる。チャタトンは悲しみに沈んでいるが、慰めてくれる友もない。チャタトンは毒杯を飲み干そうと杯を唇につける。そのとき傍にいた〈哀れみ〉(“Pity”)が、チャタトンの冷たく張り詰めた心を解かそうと試み、チャタトンに故郷の平和な様子と、チャタトンの姉と母が叫び声を上げて嘆く姿を見せ、母の声に出ない悲しみの苦悶をチャタトンに感じさせる。〈哀れみ〉は毒杯を投げ捨てるよう命じ、チャタトンはそれに従う。だが〈失望〉と〈怒り〉が立ち上がり、「冷酷な心を持つものの痛烈な侮蔑」(“the keen insult of th’ unfeeling Heart”)や「卑しく生まれついたものの心に依存する恐怖」(“The dread dependence on the low-born mind”)という、侮蔑やあざけりを語り、貧困とあわせてチャタトンの苦悩を再び思い起こさせる。そしてチャタトンは、あとずさりしながら、苦悩の友である毒杯をついに仰ぎ、死に至る。詩人は最後に、天上の玉座の周りで智天使とともにいて、賛美歌を歌うチャタトンの霊に語りかけ、詩人にもチャタトンのように琴を奏で、神聖な火でかがやけるように願う。だが憎むべきものには、断固として反対し、抗うことの許しを請う。

このように、詩人コールリッジとの同一視、困窮や嘲笑によるチャタトンの死の運命と、政治社会に対する怒りが表されている。だが、それは1790年の段階の詩の内容であり、先に見たように、「チャタトンの死に寄せる哀歌」は、非常に様々なテキストが存在し、コールリッジをとりまく状況によってそのときどきでテキストが決定したかのように見える。

自己の姿を投影したチャタトンに感ずる悲しみや、社会制度への怒りなど、様々な感情や立場や意見といった「声」がコールリッジ自身の中で入り混じるため、コールリッジは主題を一つに絞ることができない。詩の主題は、印刷する最後の瞬間や紙に書き写すときの状況によって、いわば一時的なテキストが決定されているのである。コールリッジ自身は、サウジーに宛てた 1797 年 7 月 17 日の手紙の中で、チャタトンによる詩の創作に一種独特な複雑さがあることを述べている。

on a life & death so full of heart-giving *realities*, as poor Chatterton's to find such shadowy nobodies, as cherub-winged DEATH, Trees of HOPE, barebosom'd AFFECTION, & simpering PEACE — makes one's blood circulate like ipecacacuanha [sic]. — But so it is. A young man by strong feeling is impelled to write on a particular subject — and this is all, his feelings do for him. (*Letters* 333)

チャタトンから受け取る死、希望、愛情、おだやかさといった様々な種類の感情が、コールリッジを、下剤に使われるトコンの木のように狂おしく突き動かすのである。チャタトンの影はコールリッジの感情に強く影響を及ぼした。様々な種類の感情が共存し、強く働きかけるという複雑な状況の中で、コールリッジはどの感情あるいは理念を採用することもできず、いわば様々に漂いながら、あるときは政治風刺的に、あるときは哀れみに浸り感傷的に、あるときは感情を抑制して叙情的に、あるときは落ち着いた面持ちで回顧しながらと、詩のテキストや内容の一部にそれぞれの複雑な感情を反映させながら詩作を行ったと言えるだろう。

このような決して定まることのない詩に、おそらくコールリッジは満足しなかった。なぜなら、詩の内容が創作時期によって大幅に変わっているからであり、またこの「チャタトンの死に寄せる哀歌」は、少なくとも 3 回、コールリッジ自身によって、パロディ的な詩や状況を突きつけられ、自己否定を経験しているからである。一つ目は、1790 年の草稿に付された「やかんの哀歌」である。二つ目は、1794 年の段階の内容につけられ

る予定だった削除された「付記」に関する経緯であり、三つ目は、1797年 *Monthly Magazine* 誌に載ったコールリッジ自身のさらに別のパロディによる「チャタトンの死に寄せる哀歌」の攻撃である。

1794年の削除された「付記」にまつわる経緯とは、コールリッジが非常に政治的で急進的な付記を、叙情的でロマン派的な1794年の段階の「チャタトンの死に寄せる哀歌」につけようとしたときに、後援者であり印刷業者であったコトルがコールリッジに付記をやめるよう暗に示したエピソードである。コールリッジは、付記の中で強く非難しようとした人物の一人が、陸軍の騎兵部隊のブレイク大尉の近親者であることをコトルに知らされる。たまに会う「大きな剣を持った人」とわかると、わざと深刻さを装いながら、付記を載せるのをやめようと答える。ブレイク大尉が常に携える「巨大な騎兵隊用剣」(“his huge dragoon’s sword”)は非常に恐ろしい印象を与えていたのである。コールリッジは、おどけた調子で「知らないうちに首がぶっ飛んじゃうからね」とか、「その剣を見ただけで、5、6人の詩人は、野生の象に追いかけられるみたいに、パルナツソスの山にあわてふためいて逃げていってしまうよ」と理由を述べる(cottle 1: 34-35)。

おそらくかなり感情的になって念入りに書かれたと思われる付記を、おどけて気軽に紙くずにしてしまうのである。「チャタトンの死に寄せる哀歌」はある種パロディ的な要素にさらされたと考えることができるだろう。付記をつけるかつかないかという些細なことを、深刻そうな調子でやめることにすると述べ、ブレイク大尉の様子をおかしみをこめて模倣している。

このコトルの「付記」にまつわる挿話は、記憶や何らかの記録に基づく忠実な再現というよりは、コトルが回想録の読者を喜ばせるためにおもしろく脚色したと考えることもできかもしれない。また出版の実質的な決定権はコトルにあったようであり、校正刷りの欄外で、「ここはかなり削除されています。挿入してください」(*A Facsimile Reproduction* 80)という記述が見られ、なにを活字にするかの最終的な判断はコトルにあったことを窺わせる。だが、上の引用においてコトルがある程度意図的に書いたと

しても、おそらくコールリッジが自分からおどけた調子で付記の掲載を取りやめたことは、疑いないだろう。なぜなら、コトルは上の文章で、コールリッジが社会体制に反対し、富裕階級を攻撃する政治的意図を付記に記しながらも、コールリッジ本人の行動は社会体制や上流階級に迎合するものだということを暗示するように書いているからである。

騎兵隊に属するブレイク大尉は、大きな剣を持ち、人の首をすぐにはねてしまうかのような人物として描かれている。*Illustrated English Social History* によれば、当時の陸軍の将校は、貴族の子弟か、貴族の子弟とつきあえる有産者であり、将校たちには特に軍人としての職業意識はなく、むしろ社交やスポーツのための地位であったという (35-38)。また将校の地位を得るための委任状の値段は非常に高く、*English Historical Documents* によれば、1821 年の竜騎兵隊および軽騎兵隊の大尉の委任状の値段は 3225 ポンドであった (863)¹¹⁾。すなわち、ブレイク大尉は特権階級に属し、ブリストル組合の会員というかなりの社会的地位および大尉という権力をもっている人物を意味したのである。特権階級の権力者が攻撃する相手の近親者にいることを知ったコールリッジはすぐさま付記を取りやめるが、これはコールリッジの現実をみきわめた行為であっただろう。

1797 年、コールリッジは Nehemiah Higginbottom の筆名で詩の三悪をさらけだす目的の三篇のパロディを *Monthly Magazine* 誌に掲載する。このうち最初のパロディは明らかに「チャタトンの死に寄せる哀歌」を嘲笑の対象にしていると言われ (Erdman 574-575)、コールリッジ自身は後に *Biographia Literaria* の中で、第一のパロディは「憂いに沈んだ自己中心癖や、ありふれておりかつ放埒であることの二重の欠点」(16) を健康的に笑うことであったという。

コールリッジには「チャタトンの死に寄せる哀歌」をパロディその他の行為によって自分で卑下する傾向があったが、このことは、コールリッジ

11) 1813 年刊の Jane Austen (1775-1817) の小説『高慢と偏見』に登場する、村で最も裕福な Bennet 氏の年収は、約 2000 ポンドである (29)。

がこの詩に決して満足しなかったことを示している。欠点を抱えた「チャタトンの死に寄せる哀歌」は、パロディによって詩自体を卑下し、卑下することによって欠点の埋め合わせをし、逆説的に支える必要があったと考えられる。パロディの防御的側面である。すなわち、「チャタトンの死に寄せる哀歌」は単体では存在し得ず、パロディとして付随する作品を積極的に必要としたのである。1790年の草稿においても、「やかんの哀歌」というパロディは、「チャタトンの死に寄せる哀歌」の欠点を埋め合わせるために本質的に必要であり、基盤が脆弱でテキストの移ろいやすい「チャタトンの死に寄せる哀歌」を存在させるために書かれた。そして「チャタトンの死に寄せる哀歌」は、「やかんの哀歌」を自己のテキストに取り入れることによって、かろうじて成立した。すなわち、「やかんの哀歌」は「チャタトンの死に寄せる哀歌」の一部であり、自己のテキスト自体をパロディの対象とする自己パロディだったのである。しかしながら、「やかんの哀歌」がもつ内容はより軽く、おかしみに満ちている。

3. 「やかんの哀歌」

「やかんの哀歌」は、やかんが壊れたことを嘆く8行連句の擬英雄詩である。この詩は「チャタトンの死に寄せる哀歌」と何らかのかかわりを持って書かれたと考えられる。この詩は1790年に書かれたと考えられ、二つの草稿がある。ひとつは1791年にオッターリー本に転載されたもので、連に分割され、線引きがされている。もうひとつは、本論で扱うキャンベルが報告した草稿である。オッターリー本に書き写された詩はコールリッジが死去する1834年、H. N. コールリッジの編纂によって出版された。オッターリー本の草稿と本論で扱う草稿の間には、若干の違いがある。1行目と25行目の語の配置が違ふこと、大文字の使用や感嘆符や句点の有無、前置詞、冠詞、数量、あるいは語の選択などである。草稿ではより古い語句が選択され、感嘆符の使用が多く、定冠詞やthatなどが使われており、全般的に言って、書き方が古く対象から遠く離れている。それに対し、オ

ッター一本の詩では、大文字の使用が増え、感嘆符の変わりにダッシュが使われ、定冠詞等の代わりに *he* や *thee* が使用され、少しわかりやすい形に書き換えられている。これはおそらく、家族に話して聞かせる意図のためだろう。どちらの詩でもミルトン風の言い回しがされるのは同じである。そして、最も大きな違いは、草稿では最後の連の第 33 行、34 行にみられる単語であり、草稿の “*Georgian voice*” がオッター一本では “*the glad voice*”、“*its form*” が “*the swain*” と変わっている¹²⁾。

「やかんの哀歌」では、やかんがチャタトンと同一視され、また紅茶が詩的想像力と同一視されている。初めに詩人は、チャタトンの悲しみを先頃歌った詩神に語りかけ、詩神の黒い馬を家庭の嘆きの方に向けさせるよう頼む。その黒い葬送の馬は、悲しみの行列にうなずき、死の喪章をあたりに撒き散らしながらゆっくりと進む。こうもりが鳴き、犬がほえる中、「憂鬱」に嘆きの歌を歌わせる。やかんが壊れたので、コールリッジはおしまいだと叫ぶ。次に詩人は楽しげに歌うこおろぎに悲しみの歌を歌うよう頼む。なぜならばくぶくと泡を立てながらこおろぎの歌にあわせて歌っていた「若者」(“*The sooty swain*”) すなわち、やかんは、炎の獐猛な怒りを感じていたからだ。詩人は湯がひび割れからしゅっと音を立てるのを聞き、紅茶を作って良い香りをかぐことがもはやできないことを知る。詩人は最も愛される女神である紅茶に語りかける。ワインより比べようもないほど良いものを生み出す紅茶を称揚する。紅茶が生み出すものはおだやかな喜びであり、深夜まで続く純粋な喜びである。詩人はその魅力をあきらめなければならないことを惜しむ。もはや女神である紅茶はゼウスである湯を受け入れ、湯に紅茶の魅力を与えることはないのである。詩人は、運命によって、力強きものが低く沈むのを嘆く。やかんは、軽蔑を受けて

12) 我々が普通眼にするプリンストン版、オックスフォード版、ペンギン版では “*Georgian voice*” の語は、“*the glad voice*” であり、最後の連は誰かの「陽気な声」として発話者はばかされ、語り手の想像的意味合いが重視されている。これに対し、所在不明の草稿では「ジョージの声」として発話者がはっきりと指定されている。

卑しい場所へ蹴飛ばされ、がらくたの中で黒くさ錆び付いてしまうことを想像する。詩人はやかんの口から湯がアーチを描いて注がれるとき喜びを感じていたことに気づく。紅茶の茶葉を浸出させるということは、詩的な炎がもたらす暖かな歓喜によって詩的靈感を得ることだったのである。回顧するコールリッジに兄ジョージの声が聞こえてくる（“But hark! or do I fancy *Georgian* voice —”）。ジョージはコールリッジを励まし、そのやかんが不思議な魅力を表したとしても惜しむことはないという。心の美しさを内に秘めた肌の黒いメムノンの妹も、そのように惜しむことはない。ジョージはコールリッジに紋章の記載された新しいやかんをもっていくよう勧める（“Take these bright arms with royal face imprest,”）。もっと良いやかんは、コールリッジの心を明るくし、前のやかんのことなどすぐに忘れさせてしまうのである。そして新しいやかんがもらえるというコールリッジの空想した甘美な「希望」は、コールリッジを気持ちを落ち着け、何ものっていないたくさんの五徳の上でたくさんの空想上のやかんが湯気を立てる光景を見せる。このように、やかんとはチャタトンを暗に意味し、また紅茶と紅茶のつくる魅力は詩的想像力を意味している。コールリッジはやかんが壊れ、紅茶を作ることができなくなったことを悲しみ、チャタトンが亡くなりチャタトンの詩を読むことができなくなったことを嘆くのである。

ところで、やかんとは何であろうか。「やかんの哀歌」では、“tea-kettle”の単語は第8行目にしかでてこない。オッタリー本の草稿と異なり、この草稿につけられた実際の題は「ごく最近の不幸の際に作られた第二の哀歌」であり、もともと題にも“tea-kettle”の語句はなかった。“tea-kettle”のかわりに、第26行目、第37行目、第40行目には“Kettle”あるいは“Kettles”が使われている。コールリッジは“tea-kettle”と“Kettle”を同一の意味で使っていたようである。

1790年当時、やかんはごくふつうに存在していたようであるが、“tea-kettle”すなわち紅茶をいれるための湯をわかすやかんはどちらかといえ

ばぜいたく品であったと考えられる。たとえば、1999年版の *Miller's Antiques Price Guide* によれば、“tea-kettle”には台座がついたり、あるいは簡素なコンロと台がつき携帯用のやかんであったりした(361)。素材は銀や銅のものが知られているが、値段に応じて様々なものがあったことは推測される。また1772年に『茶の博物誌』を書き1799年に第二版を出した John Coakley Lettsom は、当時喫茶の習慣が貧しい労働者階級にまで普及したことを述べている。また当時の貧しい家庭の食事は一日に三回「茶と砂糖と一かけらのパン」だけであることを述べ、茶の費用が家計を圧迫するだろうという試算を紹介している(152-157)。レットサム『茶の博物誌』に添えられた表で、中国から輸入された茶の量だけを見ても、1790年には1800万ポンドの茶が輸入されており、相当な量であったことがわかる(42-43)。当時喫茶の習慣は各家庭に広まっており、コールリッジが紅茶を飲んだであろうことも想像できる。

だが、コールリッジに茶を買う余裕はあったのだろうか。ラムは当時のクライスツ・ホスピタルの様子を *Elia* の中で述べている。ラムが回廊を歩く人がコールリッジの「若きミランドラの話と服装の不似合いさ」を推し量りながらも、コールリッジの話を賞賛の思いで聞いていたと述べており、コールリッジが貧しい服装をしていたことが推察される(48)。また食事の様子も記されており、「青白く味のない月曜日のミルクのかゆ」や、「粗野で息の詰まる日曜日の豆のスープ」など、食事が貧しく、空腹であったことが述べられている(28-29)。おそらく食堂のような場所で食事をしていたと推測される。

貧しいコールリッジがやかんをもっていたかどうかについては、「やかんの哀歌」の中にふたつの可能性を見出すことができるだろう。最後の連にみられるコールリッジの想像の中で聞こえる兄ジョージの言葉である。ジョージはおどけた調子でコールリッジを慰め、新しいやかんをもっていけと勧める。このことは、おそらく貧しい学生のコールリッジが、すでにニューカム・アカデミーに職を得ていたジョージに無心していた可能性を

示唆する。少なくとも、周りの人たちからさまざまな形で援助を受けていたことは考えられるだろう。コールリッジがクライスツ・ホスピタルに入学した年の1985年の手紙には、Badcock氏からハンカチをふたつと半クラウン硬貨をもらったことが書かれている(1)。またもうひとつの可能性とは、第40行の「たぐさんの五徳」“Trivets”である。これは五徳がたぐさん並んだクライスツ・ホスピタルの食堂の様子をさし、茶を入れるためにコールリッジが食堂を利用していたと考えられないだろうか。当時の家庭の台所の様子は、*A History of Everyday Things in England* によれば、かまどの両側にオープンと給湯タンクがそれぞれつき、かまどの熱を利用してオープンをあたためるものだった。19世紀初頭には改良され、かまどの熱がオープンの裏側を一周してオープン全体を暖めるようになった。そしてかまどの一番熱い火が届く位置に五徳を置いて、やかんの湯を沸かしたのである(174-176)。自然の火を最大限に利用する構造を持っていたが、かまどの火の勢いによって、おそらくやかんの湯は熱くなりすぎたりしたことがあったと思われる。そのようなとき、やかんは壊れたのだろう。大勢の人が利用する食堂であれば、この家庭用台所が大きくしたようなもので、大量の湯を提供するために五徳も複数並んでいたことが推測できる。

上記の解釈が可能だとすると、「やかんの哀歌」のパロディにおける最大のユーモアは、ジョージがコールリッジに新しいすばらしいやかんを提供した場面かもしれない。コールリッジは、空想の中でジョージがコールリッジにすばらしいやかんを渡すというイメージを描いて、ジョージ本人の目の前でこの詩を暗誦することによって、ジョージにやかんを無心したのである。しかも今よりもっと良いやかんである。「高貴な顔が刻印された輝く腕」(“these bright arms with royal face imprest”) (36) とは、やかんにつけられた紋章のことを暗に意味するのかもしれない。*Miller's Antiques Price Guide* には紅茶ポットの刻印についての説明があり、「19世紀初頭の取っ手付近に一列に記されたものを除き、紅茶ポットには底にひと

かたまりに刻印がされていた。ふちにはライオンが右前足をあげる印、製造業者の刻印、1784 年以降は王族の顔と日付」(361)がつけられていた。高価なティーポットは、茶道具一式がセットで作られていたこともあり、“tea-kettle” にも同様の刻印、特に王族の顔が刻印されていた可能性がある。すなわち、非常に高価な良いやかんをコールリッジは無心しているのである。

第 33 行の “*Georgian voice*” という単語は、オッタリー本では “the glad voice” と普遍的な人物の声に変更されている。コールリッジにやかんを与える人物は現実の存在のジョージから誰かわからないひとつの声に変わり、コールリッジが空想の中で希望を抱く想像上の話に変わる。家族の前でジョージにやかんを無心することはできないであろうし、また 1791 年当時生家にいたコールリッジにはやかんは必要なかったであろう。

この説が可能だとすれば、コールリッジは「やかんの哀歌」で、著しく直接的に「対話」を求めていると言える。詩の中での相互に影響し合う詩的対話ではなく、むしろ詩によって現実の物質を求めるのである。より徹底的で現実性を伴う詩的対話であると言えるだろう。

4. 自己パロディの機能

「やかんの哀歌」は「チャタトンの死に寄せる哀歌」に対して、テクストの内部で、どのような形で自己パロディを行ったのだろうか。最初に、手がかりと思われる単語について考察したい。「やかんの哀歌」にみられる「メモノンの妹」(“Memnon’s sister”)の記述である。メモノンとは、ギリシア神話では、トロイの包囲においてトロイ側について戦い、アキレウスに殺されたエチオピアの王であるが (*Complete Poems* 434)¹³⁾、メモノンの妹は、後世の作家による創作上の人物である。メイズはプリンストン版の注でミルトンの「沈思の人」(“Il Penseroso”)からとった人物であ

13) なおメモノンに関しては、当時の詩では、テーパーにあるメモノン像を指す場合が多い。これは陽光を受けると堅琴から心地よい音楽を発する硬質の石像である (Akenside 65)。

ろうと述べている (*Collected Works* 1: 30)。「沈思の人」では、〈憂鬱〉をたたえ、〈憂鬱〉の容貌があまりに明るすぎるために、人の視覚でとらえるには適さないことが示される。その〈憂鬱〉は通常黒い容貌をしており、あたかもメモノン王子の妹にふさわしいかもしれない黒さであることが述べられる (*Norton Anthology* 1786)。また 1898 年版の *Dictionary of Phrase and Fable* によれば、メモノンの妹は、兄の死を聞き、遺体を引き取りに行こうとしたときに、戦利品を携えたパソスに会い、戦利品と骨壺のどちらを取るかと聞かれて骨壺と答えた、心が清く美しい黒人の娘である。

すなわち、「メモノンの妹」は、心の清い娘のような人物を意味し、同時に、「やかんの哀歌」に対する「沈思の人」からの影響を示唆している。この「沈思の人」は、「快活なる人」(“L’Allegro”)と対になる詩作品の姉妹篇である。「快活なる人」では、〈快活〉の女神 “Mirth” を称揚すし、「沈思の人」では〈憂鬱〉の女神に平和・静穏・沈思を祈願する。ノートン版の注によれば、二つの詩は、両方とも四歩格連句でありながら、全く異なるテンポと音質を生み出しているという。また、題がちょうど相反するように、ふたつの詩は注意深く均衡を保ちながら、快活と沈思、それぞれの価値を称揚するという (*Norton Anthology* 1782)。たとえば、「快活なる人」では朝の典礼が雄鶏や猟犬によって歌われ (49-56)、「沈思の人」では夜の典礼が美しい鳥によって歌われる (61-64)。

ミルトンのこれら二つの詩は、互いに呼応しあい、それぞれの美点を歌いながら、二つでひとつの和声を奏でるといえるだろう。そしてコールリッジが草稿のふたつの詩に意図した機能も、まさにこれに他ならないにちがいない。

「チャタトンの死に寄せる哀歌」では、チャタトンは〈困窮〉と〈冷徹な無視〉によって精神が冷やされ (“chill’d thy soul”) (5)、死に至る運命を背負っている (69)。またコールリッジは「怒りの閃光」(“a flash of Rage”) (11) を感じ国家に対し憤りを感じる (13-23)。「やかんの哀歌」

では、「すすけた若者」(“*The sooty swain*”)¹⁴)であるやかん、すなわちチャタトンは、語り手の「炎の恐ろしい怒り」(“*the fire’s fierce rage*”)を感じ(13)。また「運命」(“*Fate*”)に押しつぶされて、力強き者たちは沈んでいく。あるいは、「チャタトンの死に寄せる哀歌」では、国家(“*land*”)に対する憤りが語られるが(13)、「やかんの哀歌」では、舞台は「家庭の嘆き」“*griefs domestic*”である(2)。また、「チャタトンの死に寄せる哀歌」では、チャタトンは、青黒い色の亡骸となって、むき出しの大地にころがるが(7-8)、「やかんの哀歌」では、やかんは卑しい場所に蹴飛ばされ、鉄くずの中でぼんやりと錆びていく(15-16)。また、「チャタトンの死に寄せる哀歌」では、陰鬱さが強調されるが(55-68)、「やかんの哀歌」では、やかんは壊れる前はこおろぎの陽気な歌声に合わせて陽気に湯気をたてていた(9-12)。そして、「チャタトンの死に寄せる哀歌」では、チャタトンを死に追いやる原因のひとつが「貧困」であるが(48)、「やかんの哀歌」では、新しい高価なやかんをジョージがコールリッジにわたす(36-37)。

このように、「チャタトンの死に寄せる哀歌」と「やかんの哀歌」でも、各部分が互いに互いの部分と呼応し合い、どちらかひとつではもはや不完全な詩という印象すら受ける。「チャタトンの死に寄せる哀歌」は、詩自体が持つ複雑さとひとつに定まらないという欠落から、自己を批評することで支えとなる「やかんの哀歌」を必要とし、「やかんの哀歌」はパロディとして対象となる「チャタトンの死に寄せる哀歌」を必要とし、「チャタトンの死に寄せる哀歌」と呼応する。ふたつの詩は、互いにそれぞれ自己の詩の美質を述べながら、互いの詩の要素と呼応し合い、全体としてひとつの和声をつくりあげるのである。

この二つの詩に共通する姿勢は、詩的対話という他者への語りかけである。「やかんの哀歌」では、コールリッジがジョージに対して直接語りか

14) “swain” は、ミルトンの *Lycidas* において繰り返し使われる亡くなった友人を示す単語であり(92、113、186)、ここでもコールリッジのミルトンからの影響をみることができる。

けてやかんを無心し、「チャタトンの死に寄せる哀歌」では、チャタトンの強い感情に突き動かされたコールリッジは、さまざまに共存する複雑な感情をチャタトンにぶつけるように語りかけていたのである。二つの詩は、相補関係にあり、支え合うように呼応してひとつの詩となった。そして、前述した、「インヴォケーション」と呼ばれる無題の断片も、対話を希求するという点で、二編の詩と同じ姿勢を共有する。三篇の詩は、詩的対話を求める姿勢によって、ひとつにまとまり、三篇でひとつの作品となるのである。

チャタトンの影がコールリッジに影響を及ぼすために、「チャタトンの死に寄せる哀歌」は単体で存在できなくなった。そこで自己を否定することで防御の機能を果たす「やかんの哀歌」のパロディを、自己のテキストに取り込む必要が生じ、このとき「やかんの哀歌」は自己パロディとなることがわかった。この自己パロディは、「チャタトンの死に寄せる哀歌」と相補関係を築く過程で、支え合うように呼応した。また「やかんの哀歌」自体にも、チャタトンの影と同じく、ジョージの影という対話者が存在し、対話的な特徴が認められた。キャンベルによって報告された1970年の草稿に記載された三篇の詩は、自己パロディを行う一つのまとまった作品であり、そこには常に、コールリッジが特定の対話の相手を意識し、対話の相手に影響を受けて創作を行う詩的対話の実践があったのである。

References

- Abrams, M. H. et als. eds. *The Norton Anthology of English Literature*. 7th ed. Vol. 1. New York: Norton, 2000. 1782-1796.
- Austen, Jane. *Pride and Prejudice*. 1813. London: Penguin, 1996.
- Brewer, E. Cobham. *Dictionary of Phrase and Fable*. 1898. Online. Bartleby.com. <http://www.bartleby.com/81/.11285.html>
- Coleridge, Samuel Taylor. *The Collected Works of Samuel Taylor Coleridge*, 16, *Poetical Works*. Vol.1. Part 1. Ed. Mays, J. C. C. Bollington Ser. 75. New Jersey: Princeton UP 2001.
- , *The Poetical Works of Samuel Taylor Coleridge*. Ed. James Dykes Campbell.

1893. London: Macmillan, 1907.
- , *Coleridge's Poetry and Prose*. A Norton Critical Edition. Eds. Nicholas Halmi et als. New York: Norton, 2004.
- , *Poetical Works*. Ed. Ernest Hartley Coleridge. 1912. Oxford: Oxford UP, 1969.
- , *The Complete Poems*. Ed. William Keach. London: Penguin, 1997.
- , *Coleiridge's Poems, A Facsimile Reproduction of the Proofs and MSS. of Some of the Poems*. Ed. James Dykes Campbell. Westminster: Archibald Constable, 1899.
- , *Biographia Literaria*. Ed. Nigel Leask. Everyman. London: J. M. Dent, 1997.
- , *Collected Letters of Samuel Taylor Coleridge*. Ed. E. L. Griggs. Oxford: Clarendon, 1956. 2 Vols.
- Cottle, Joseph. *Early Recollections, Chiefly Relating to the Late Samuel Taylor Coleridge*, Vol. 1. London: Longman, 1837.
- Dentith, Simon. *Parody*. London: Routledge, 2000.
- Douglas, David C., ed. *English Historical Documents, 1783-1832*. London: Eyre & Spottiswoode, 1959.
- Erdman, David V. "Coleridge as Nehemiah Higginbottom." *Modern Language Notes*. 73 (1958): 569-580.
- Fairer, David. "Chatterton's Poetic Afterlife, 1770-1794: A Context for Coleridge's Monody." ed. Groom, Nick. *Thomas Chatterton and Romantic Culture*. Basingstoke: Macmillan, 1999. 228-252.
- Freeman, Arthur and Theodore Hofmann. "The Ghost of Coleridge's First Effort: 'A Monody on the Death of Chatterton'." *The Library, The Transactions of the Bibliographical Society*. 6th Ser. 11 (1989): 328-335.
- Gordon, I. A. "The Case-History of Coleridge's Monody on the Death of Chatterton." *Review of English Studies*. 18 (1942): 49-71.
- Gray, Thomas. *The Complete Poems of Thomas Gray*. Eds. H. W. Starr and J. R. Hendrickson. Oxford: Clarendon, 1972.
- Holms, Richard. *Coleridge: Early Visions*. London: Harper Collins, 1998.
- Lamb, Charles. *Elia*. 1823. A Woodstock Facsimile. Oxford: Woodstock, 1991.
- Mark Akenside. *The Poetical Works of Mark Akenside*. London: Bell and Daldy, n. d.
- McFarland, Thomas. "The Symbiosis of Coleridge and Wordsworth." *Studies in Romanticism*. 11 (1972): 263-303.
- Martin, C. G. "Coleridge, Edward Rushton, and the Cancelled Note to the 'Monody on the Death of Chatterton'." *Review of English Studies, A Quarterly Journal of English Literature and the English Language*. 17 (1966): 391-402.
- Norfolk, Elizabeth, ed. *Miller's Antiques Price Guide 1999*. Vol. 20. Kent: Reed Consumer, 1998.
- Oxford English Dictionary*. 2nd ed. Oxford UP, 1989. CD-ROM. 2002.
- Paul, Magnuson. "Coleridge's Discursive 'Monody on the Death of Chatterton'." *Romanticism on the Net*, 17, (2000): N. pag. <http://users.ox.ac.uk/~scar0385/17>

monody.html.

Quennell, Marjorie and C. H. B. Quennell. *A History of Everyday Things in England*. London: B. T. Batsford, 1961.

Trevelyan, George Macanlay. *Illustrated English Social History*, Vol. 4. London: Longmans, 1952.

Warton, Thomas. "Ode VI. The Suicide." *The Poetical Works*. 1802. *English Poetry*. 2nd ed. Online. English Poetry. N. pag.

宇佐美道雄『早すぎた天才：贋作詩人 トマス・チャタトン伝』（東京：新潮社、2001）

ジョン・コークレイ・レットサム『茶の博物誌：茶樹と喫茶についての考察』（滝口明子訳、東京：講談社、2002）

松島正一『イギリス・ロマン主義事典』（東京：北星堂、1995）